世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

武職野大学仏教文化研究所客員研究員　小野澤眞君の訃を聞きて　狂詩曲(ラプソディ)・イン・鼠(グレイ) : 彼と私のブルース

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2019-07-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 古賀, 克彦
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1038

武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員　小野澤眞君の訃を聞きて

狂詩曲（ラプソディ）・イン・鼠（グレイ）――「彼と私のブルース」

古賀克彦

出会い

小野澤眞君（一九七一年十一月十二日～二〇一八年一月四日）と出会ったのは、私が日本史教育研究会の東京支部長を任されていた時、同会会員の戸塚高校（当時）の世界史と政治経済の教員であった智野豊彦君（小野澤君の命名した渾名は「チノッピー」）が、「面白い教育実習生がいるから」と連れて来たのが最初だったと思う。私が千代田女学園に勤務していた一九九三年頃だったか。小野澤君は私より十歳ほど下だったが、老成した文章を書く人だった。古田武彦氏（一九二六年八月八日～二〇一五年十月十四日）に私淑しており、青山学院で古代史を学んでいた。確か、『シンポジウム　邪馬壹国から九州王朝へ』新泉社（一九八七年十月）に名前が出ていた筈である。私も、彼の引き合わせで古田氏から親鸞に関する個人的レクチャーを文京シビックセンターで受けたことがある。一九九六年三月の昭和薬科大学に於ける古田氏の定年退職記念講義にも共に出席した。彼が文字通り心血注いで作成した、後述する雑誌『寺社と民衆』最終号の訃報欄に古田氏を載せているのも、奇しき因縁であろうか。

なお、彼の命名した私の渾名は「公方」。由来は「古河公方」から。彼は独特の名付けをしていたので、この文中で紹介する。

彼は古代史専攻だったが、青山学院在学中の史学科旅行か何かで、藤原良章氏の案内で鞆の浦に行ったことが、のちの中世史研究の端緒になった、とよく語っていた。

その後、國學院大學大学院修士課程で引き続き古代史を学んでおり、私が国府台女子学院に移った一九九五年頃、智野君の自宅で何回か彼の連れてきた友人と、古代史の研究会を開いたこともある。

丁度、彼と出会った一九九三年頃、五味文彦・黒田日出男・藤本正行各氏などの間で、『一遍聖絵』の分析方法をめぐる論争が展開していた。私もそれに刺激されて日本史教育研究会の例会で、五味文彦「絵巻の視線―時間・信仰・供養―」（『思想』八二九号、岩波書店、一九九三年七月）を取り上げたことがある。それを聴いた小野澤君も、以前より一遍や時宗（時衆）に興味を持っていたこともあり、傾倒していった（遊行七十二代・藤沢五十五世他阿一心上人寺沼琢明師から賦算を受けた事がある、と言っていた）。またその寺沼師から大正大学在学中、授業を受け、時宗研究に目覚めた大橋俊雄師が住職を務める西林寺のある横浜市戸塚区（現・泉区）岡津町の近隣に居住していたという事情もあったらしい。

たまたま、『時衆の美術と文芸　遊行聖の世界』巡回展が一九九五年十一月三日より山梨県立美術館を皮切りに開催され、黒田日出男論文で知った、『一遍聖絵』の頭巾の柿色を確かめる為、私は単独で甲府へ赴いた。その後、一九九六年一月の長野市立博物館へは行けなかったが、一九九六年二月の藤沢市民ギャラリーと同一九九六年三月～四月の大津市歴史博物館には彼と赴いた。

彼の渾名は「脇侍」。生徒命名

彼との時宗寺院行脚も、この頃からだが丁度、現在の勤務校で「仏教研究会」という部活動を始めた頃で、様々な校外活動（美術館・博物館等）に彼も参加した。

「死去ネット」というサイトで小野澤眞の項を視ると、二〇一八年五月二十五日に以下の書き込みがあった。

貴方様とは、いろんな旅を御一緒させて頂きました。千葉県や山梨県甲府市、箱根、強羅、両国博物館など案内させて頂いて今では、とても良い思い出です。一生忘れる事は、ないです。有難う申し上げます。

（原文ママ）

この投稿主は私ではないが、確かに千葉県（千葉城址・佐倉・佐原・香取）や甲府市（一蓮寺）、両国の江戸・東京博物館には帯同した。遠くは山形（天童）・群馬・栃木・滋賀（米原）・兵庫までも。

さて、今は無き東武美術館での事。「役行者神変大菩薩千三百年遠忌記念　役行者と修験道の世界展」（会期一九九九年九月十一日～十月十七日）。常に私に付き従う小野澤君を見て、中3の部員が一言、「脇侍」と。暫く部内で彼はそう呼ばれていた（私は「日輪寺徒弟」と呼んでいたけれど）。

さて、時宗史研究を志した彼は一九九七年、「國學院の博士課程にそのまま進むべきだ」、という私の反対を押し切り、大橋師も学んだ大正大学大学院修士課程に転じ、中・近世仏教史の宇高良哲師の下で研鑽した。

トロイの木馬1

その後、浅草日輪寺の原弘道僧正を師として時宗に僧籍編入し、総本山清浄光寺（遊行寺）に在堪。その時、彼は「自分の行動はトロイの木馬」と言っていた。私を時宗に転宗させる積りだったらしい。

在堪中、時宗教学研究所の竹内明正所長の推輓で一九九七～二〇〇〇年度、時宗教学研究所専任（自称）研

究員となり、一九九九年度、宗門立の藤沢翔陵高等学校（旧・藤沢商業高等学校）地理・歴史科非常勤講師、二〇〇二年度、東京家政学院大学の西海賢二氏の紹介で同大学人文学部非常勤講師、二〇〇四年度、上智大学の北條勝貴氏の紹介で国立歴史民俗博物館リサーチアシスタント等を経験した。

なお、彼の正式な経歴年代は、法藏館社員の秋月俊也君が書いた訃報記事（日本歴史学会［編集］『日本歴史』八四一号、吉川弘文館、二〇一八年六月）に依るので、そちらも参看されたい。秋月君は二〇一七年八月三日がメールの最後と書いているが、私はもう少し遅かった気がする。その『日本歴史』には、秋月君が編集を担当した村井康彦・大山喬平［編］『長楽寺蔵 七条道場金光寺文書の研究』法藏館（二〇一二年十月）の書評と紹介を二〇一三年十一月に寄せている（同誌七八六号）。

様々な研究会への参加と立ち上げ

彼からは多くの研究会を教えてもらったし、共に参加した。数え上げるだけでも、東京大学史料編纂所での中世宗教史研究会や『蔭涼軒日録』輪読会、京都大学での山折哲雄先生を囲む研究会（一九九九年五月一日）、寺院史研究会・社寺史料研究会・史学会・日本史研究会・歴史学研究会・地方史研究協議会・日本思想史学会・日本仏教綜合研究学会・日本印度学仏教学会・日本宗教学会。その他、日本民俗学会・悪党研究会・戦国史研究会・関東近世史研究会・宗教史懇話会（サマーセミナー）など敷居の高そうな会にも積極果敢に参加・発表していた。私は大の人見知りで引っ込み思案。彼の慫慂が無ければ、現在の人脈は作れていまい。その点でも、彼に感謝している。

エポックとなった『一遍聖絵』成立七百年の記念すべき一九九九年

私は以前、「一九九九年四月十九日、片山法台寺を鳥取大学名誉教授の故金井清光博士の導きで訪れたのが、時衆研究の発端であった」と書いたが（砂川博［編］『一遍聖絵と時衆』岩田書院、二〇〇九年十月）、小野澤君には不評だった。きっと、「もっと以前から俺と沢山寺院を回ったのに」という思いだったのだろう。

この金井先生（雑誌『時衆研究』創刊者）は「時衆学」の先駆者であり泰斗なのだが、その研究のきっかけは武蔵野女子学院高校国語科非常勤講師時代の教頭・雲藤義道氏（のち武蔵野女子大学長・武蔵野女子学院長）から、同郷出雲の島根大学教授・河野憲善師（のち遊行七十三代・藤沢五十六世他阿一雲上人）を紹介された事に始まる、という。片山法台寺の住職夫人も武蔵野女子学院出身で、仲良く思い出話をなさっていた。

同（一九九九）年秋、当時、相愛大学教授だった砂川博氏を二人で訪ねて、砂川氏の鳥取大学における恩師である金井先生を慫慂し、同人四人で時衆文化研究会を発足、機関誌『時衆文化』を二〇〇〇年春に創刊した。小野澤君は、時衆文化研究会関東支部を立ち上げて、例会活動を行なっていたが、サントリー文化財団二〇〇〇年度助成の「一遍聖絵研究会」のメンバー十名の枠から年齢順だった為に洩れた事等を端緒として、砂川氏と疎遠になり、『時衆文化』編集委員も十号（二〇〇四年十月）までで退任した。同会関東支部を母胎に民衆宗教史研究会を発足させ、二〇〇一年五月から活動を本格化し、同年七月には群馬から山形までの長期巡見を実施、二〇〇五年三月には『時衆文化』に対抗するが如く、機関誌『寺社と民衆』を創刊した。同会は個人商店の様相を示し、同誌は一種の個人雑誌ではあるが、詳細な「彙報」欄があり、本編よりもそこへの執筆に文字通り執念を燃やしていたが（後述）、各種研究会を報告するコーナーには頑として「一遍聖絵研究会」を掲載しなかった。理由は「会員が限定されている、閉ざされた研究会は対象としない」旨であったが、そこには彼なりのルサンチマンを感じる。だが、その思いこそが、論文執筆の原動力でもあった。

精力的に活動していた彼を病魔が襲ったのは、二〇〇四年九月三十日の東京大学本郷校舎近くの喫茶店ボンアートでの民衆宗教史研究会例会席上であった。前々から腰痛・肩痛が酷いとこぼしていたが、いつも重い本類を運んでいたからぐらいにしか思っていなかったようである。私達は、日頃の食生活の所為だろうと思っていた。菅根幸裕氏の報告発表中、中座して長い東司時間（トイレタイム）から戻って間も無く、突然苦しみ出し嘔吐して倒れてしまった。参加していた菊地大樹氏が東京大学病院に連絡して彼を運び込んだ。私も付き添った。救急車に乗ったのはその時が最初である。その後、三楽病院に入院した彼を数回見舞ったが、病床には細川武稔君（彼の命名した渾名は「管領」）が居た事もある。細川「管領」は『祈りの道』（世田谷美術館での会期は二〇〇四年十一月二十日～二〇〇五年一月二三日）の図録を古書店にて格安で手に入れたと話していたから、時期は合致する。ある時、銀だこの蛸焼き片手に見舞うと、「絶対安静で面会謝絶」と看護師に告げられた事もある。

トロイの木馬２　東北へ

その後、天童仏向寺を研究する為か、山形大学大学院修士課程に入り、松尾剛次氏の下でも学んだ。確か、その頃懇意にしていた日本大学大学院生の高田（たかた）祐資君（彼の命名した渾名は「ジャパネット高田（たかた）」）と共に入学したかで、今回も「自分の行動はトロイの木馬」と言っていた。私を巻き込む積りだったらしい。

その後、東北に縁ができ、古田武彦氏の母校である東北大学大学院博士後期課程に社会人枠だったかで入り二〇〇九年、単位取得満期退学。翌年九月、同大学から博士（文学）を授与された。「論文審査結果の要旨」に、

論述は博引芳証を極め、丹念な実地調査の成果も織り込んで、豊かな歴史像を提示している。本論文には、おおよそ現在知りうる限りの時衆情報が盛り込まれているといっても過言ではない。加えて中世宗教史・

仏教史の組み替えにつながる重要な問題を提起しており、斯学の発展に寄与するところ大である。

とある。この博士論文を纏めたものが、浩瀚な主著『中世時衆史の研究』である。「二〇一一年より東北大学大学院文学研究科専門研究員を併任した」、と同書の著者情報にある。

文献目録と彙報（学界展望、等）

彼とは一九九七年以来、『時宗教学年報』誌上で約二十年間に亘って長らく「時衆関係文献刊行物紹介」を共同執筆の名目で行ってきた。その連載は当初、岩田書院から纏めて出版する計画で、その意向を汲んで岩田博社長も種々文献を紹介する等協力して貰っていたのだが、二転三転・紆余曲折して高志書院から彼の単独編著として『時衆文献目録』が刊行された（二〇一五年四月）。私も計画段階では参加予定で、二〇一三年六月十五日の土曜日、彼と神田神保町の高志書院を訪ねた。『時衆文献目録』の「編纂後記」に（数字は改めた）、

本目録は、古賀克彦氏とともに『時宗教学年報』（時宗教学研究所・毎年3月）において、一九九八年以来「時衆関係文献刊行物紹介」（初回の第二十六輯のみ「時宗」と表記。二〇一四年の第四十二輯は不載）と題し連載してきた文献目録を九〇年代以降の情報については基礎とし、（中略）さらに大幅に加筆・修正したものである。（中略）予告どおり無事発刊できた。編纂工程上の都合で本目録は筆者を単独編者としたが、古賀氏のご理解・ご協力を仰いだことを特記しておく（「時衆関係文献刊行物紹介」では二〇〇〇年代中盤以降、筆者の長期療養もあり、筆者が一部情報を送り、大枠を古賀氏が作成する形となった。精緻な註釈の多くは同氏の力作である）。

とある通りである。また、最後に、

本目録編纂過程は筆者の研究人生そのものでもある。調査で各地へ行くと図書館に寄るよう心がけ、日常

生活でも常に文献に対し網を張りメモ帳に控えてきた。こうして形になると感慨深いものがある。情報集積には多くの方々の助力をいただいた。本目録に収録した文献をものされた諸先学や従前の目録を編纂された諸先学、および「時衆関係文献刊行物紹介」連載の場を与えていただいている時宗宗門、〝同行二人〟古賀克彦氏に深く謝し奉る。（中略）二〇一六年四月七日　大先達たる金井清光氏の命日に

とある。また、『時衆文献目録』に収めた【研究動向】時衆研究の三世一過去・現在・未来一」に、

本目録を繰ればわかるとおり、時衆研究史には金井清光という巨星が存在し、文字どおり孤累奮闘していた。ただ金井氏が文学専攻だったせいか、その成果が日本史方面で活かされることがほとんどないのが実情である。氏は時衆にいろいろな流派があることを明らかにした〝多元的時衆〟論者であり、筆者もそれを承けて四条派、解意派、一向・天童派、霊山派、当麻派について論じてきた。また筆者の畏友古賀克彦氏は四条派、御影堂派、一向・天童派について論じ、秋月俊也氏は遊行派（藤沢派）の中でも教学の実質の大成者ながら近年研究が緒についたばかりの遊行7代他阿託何をとりあげている。宗学の最高責任者である長塚昌幸氏の論攷群も「宗」形成をたどる重要な論点を含む。我々時衆研究第3世代は大なり小なり脱構築の金井史観に拠っている。

とある。

彙報（学界展望、等）に関しては、実は彼も忘れていた「幻の彙報」がある。記録魔の私は大事に保管していたのである。本来は『時宗教学年報』27輯、（一九九九年三月）に載せるべく書いたようだがボツになっている。一九九八年度の記録である。他に『時衆文化』5号（二〇〇二年四月）に「学界彙報（二〇〇〇～二〇〇一年度。含補遺）」があり、あとは毎号の『寺社と民衆』に二〇〇四年度以降が載る。晩年はプラスして、「放映」欄まで新設し、一九九一年の大河ドラマ「太平記」にまで遡って記載している徹底振りである。この

辺りは、私と共通している。

ただ、音楽の趣味は合わなかった。まあ、私と波長が会う人は稀だが。よって、本稿のタイトルは「ブルース」にした（え？）。学生時代から私の大好きな大貫妙子の「彼と彼女のソネット」を捩りたかったのだが、ソネット（定型詩）じゃ無いよなあ、と思い直したからである。元ネタが「義母と娘のブルース」なのが、相応しいかと。ガーシュウィンの「狂詩曲（ラプソディ）・イン・ブルー」でも良かったか。勿論、お互い「狂」の部分が、である。種々熟慮した上で再考。古田武彦風に言えば、こうなる。「否（ノン）、時衆の衣は鼠色。拠って、狂詩曲（ラプソディ）・イン・鼠（グレイ）と命名す」

本仏教文化研究所との縁

山崎龍明先生が所長を務めておられた頃、私も研究員では無かったのだが、山崎先生に彼を紹介し、二〇〇二年より武蔵野女子大学（現・武蔵野大学）仏教文化研究所非常勤（現・客員）研究員となった（私は、彼より遅れること数年後に委嘱された）。以後、研究員例会での発表や司会、紀要に精力的に論文を発表していた（大塚紀弘君を本仏教文化研究所に紹介したのは彼だそうである）。

山崎先生は彼の事をいつも気にしておられ、今回の追悼企画も先生の発議である。彼は、そんな先生の好意に甘えてか、『寺社と民衆』第二号（二〇〇六年三月）の「編集後記」に、

なお次号より本会（民衆宗教史研究会）の住所が武蔵野大学仏教文化研究所に変更となる。ご許可いただいた山崎龍明所長および関係者各位に心よりの謝意を表したい。例会などの会場としても活用させていただけるとのこと

と書き、続く同誌第三号（二〇〇七年三月）の同欄にも、

また前号で予告したとおり、武蔵野大学仏教文化研究所の全面協力によって、本部を同所気付とさせていただくこととなった。関係者には感謝の言葉もない。これまでの菅根幸裕研究室にも心よりの謝意を表する

と綴った。手元に同誌全号がないので確認不十分だが、第七輯（二〇一一年三月）までは武蔵野大学仏教文化研究所・気付となっている。そして同誌第十三輯（二〇一七年三月）の「編修後記」に、

実はまったくの私事で恐縮だが、昨年編修子は厚労省指定の難病であることが発覚し、さらに今年に入り硬膜下血腫を患い要介護認定を受けあと何年生きられるかわからなくなった。本誌は創刊以来全号全ページを編修子が独りで編修してきた。

とある。彼が本研究所「紀要」に掲載した論文は4本。私などは本願寺派の宗門大学の機関誌だからと阿って、無理やり真宗を取り上げているのだが、彼はストレートに時衆を探求していた。唯一「他宗祖師伝説―各地の寺院にみる信者獲得の一手―」（№31、二〇一五年三月）のみ、真宗も含めて題材としていたが、取り挙げた主眼は鉄輪永福寺・四国88箇所78番郷照寺・法然上人25霊場14番霊山正法寺・円山安養寺・比叡山延暦寺東塔大講堂一遍像・高田称念寺・信州善光寺一遍参詣・無量光寺・四天王寺円成院であった。

最後に、デジタル遺品整理の対象となるような事例だが、彼の facebook の自己紹介を、数字類を改めた上で転載する。

歴史家です。専門は日本中世仏教史ですが、広く科学全般に関心をもっています。著書は『中世時衆史の研究』八木書店（二〇一二年六月）と『時宗当麻派七〇〇年の光芒―中世武家から近世・近代庶民の信仰へ―』日本史史料研究会企画部（二〇一五年三月）、『時衆文献目録』高志書院（二〇一六年四月）です。現在4冊目『埋もれた一向宗―一向義空とその教団―（仮題）』同成社（二〇一九年十一月）を執筆中。

人との出逢いは財産ですね。

彼の二十五年の歴史を語る事は、私の四半世紀を叙述する事でもあった。

二〇一九年一月四日　彼の命日に脱稿

（国府台女子学院高等部教諭、近世仏教史）